

「調理」をテーマとした4段階の実践過程における成果と課題に関する内容検討
 — 筑北村の高齢者・小学生と本学介護福祉学科の学生との学びと交流から —

A study on results content and challenges content in the four stages of the practice process
 on the theme of "cooking"

— From learning and exchanges between the elderly and elementary school students of
 Chikuhoku village and students of care welfare department of Matsumoto Junior College —

福田 明 釜土 禮子 合津 千香
 Akira FUKUDA Reiko KAMADO Chika GOZU

要旨

2012（平成24）年度、松本短期大学と長野県筑北村は教育支援等を目的に連携協定を結び、いくつかの交流事業を行ってきた。本稿では、その中から2015（平成27）年度に実施した「調理」をテーマとした学びと交流の実践過程を示し、それらの実践から介護福祉学科の学生が得た成果と課題を明らかにすることを目的にした。

本実践過程は第1段階「調理の必要性を知る」、第2段階「調理の基礎を学ぶ」、第3段階「高齢者から郷土食作りを学ぶ」、第4段階「郷土食を小学生に教える」の4段階に分けられ、そのすべての段階に参加した介護福祉学科の学生10名を対象にフォーカスグループ・インタビューを行った。その結果、成果内容は①連続性のある企画の重要性、②知識の広がりとなつた気づき、③一緒に調理する楽しさと安心感、④調理への意欲向上、⑤責任感と気遣いの意識醸成、⑥目指すべき介護福祉士像への参考、⑦伝え方の工夫と場作りの重要性となった。一方、課題内容は①わかりやすく説明する難しさ、②事前準備の必要性が見出された。

本実践過程からは単に調理技術の向上だけでなく、いくつかの必要性・重要性が示唆された。すなわち①学生と教員のための枠組みを超え、地域住民とも接点を持てる連続性のある企画を実施する必要性、②学生の段階から多様な人たちと関わり、個々人に応じたコミュニケーション能力を高める必要性、③様々な人たちと顔の見える関係性で一緒に取り組むことの重要性が示唆された。これらは学生時代だけでなく、介護福祉士として働き始めてからも重要である。

【キーワード】 調理 高齢者 小学生 学生 介護福祉学科

I 背景と目的

大学を地域における重要な資源と位置づけ、地域の活性化に向けて積極的に活用していく連携の取り組みは、近年さまざまな大学と地域で行われるようになった¹⁾。大学と地域との連携の重要性が増す中、2012年度、松本短期大学は長野県筑北村と教育支援等を目的に連携協定を結び、これまで介護福祉学科の学生による小学生への福祉教育や通所介護への訪問等、いくつかの交流事業を行ってきた。中でも2015（平成27）年度は「調理」をテーマとし、選択科目「家政の生活支援」以外の時間に、介護福祉学科1年生45人が筑北村の高齢者や小学生と計画的な学びと交流を展開してきた。

「調理」をテーマとした理由の1つは介護福祉士養成教育の中で家政学が極めて重要な学問であり²⁾、家政学が生活支援に必要な科学的知識と技術を提供し、介護福祉士の専門性向上に寄与してきたという評価があるにもかかわらず^{3) 4)}、旧カリキュラ

ムで必修だった調理実習が必修でなくなる等、現在のカリキュラムでは家政を体系的に学ぶ時間が限られてしまったからである。

では、こうした背景を踏まえた上で、実際には「調理」をテーマとした学びと交流がどのように展開されたのか。そしてそれに参加した学生は何を学び得たのであろうか。そこで本研究では、これら2つの問いに迫り、今後の交流事業と介護福祉士養成教育への示唆を得るため、次の2つの目的を設定した。すなわち本研究では、第1に「調理」をテーマとした学びと交流の実践過程を示すこと、第2に本実践過程を通して介護福祉学科の学生が得られた成果と課題を明らかにすることを目的とした。

II. 対象と方法

本研究では第1の目的達成に向けてA調査を、第2の目的達成に向けてB調査を以下のとおり実施することにした。

1. A調査の概要

2016（平成28）年5月、「調理」をテーマとした学びと交流の実践に主に関わった松本短期大学介護福祉学科教員3名に、それぞれの実践の背景（実践の根拠となった調査結果・文献等）・目的・内容・方法（工夫した点等）等について記述してもらった。筆者の1人がそれらを内容別に整理した後、残る2人の筆者がその結果について確認・修正を行った。

2. B調査の概要

1) 調査方法とその選定理由

本調査を行うにあたり、すでに調査対象者は1年生から2年生に進級していたため、まずは現在の介護福祉学科2年生が1年生で行った「調理」をテーマとした学びと交流について思い出す必要があった。そこで個別インタビューではなく、参加者が話し合う中で、お互いに語りやすい雰囲気を作り、当時の出来事を思い出せるようフォーカスグループ・インタビュー（focus group interview）を採用することにした。フォーカスグループ・インタビューとは「当事者の言葉や言動」「実践」「生活の場」から新しい理論や方法を生み出す質的研究法の1つで、力動的な当事者間のやり取りからより自然体に近い方法で醸し出された情報を把握できる等の強みがある⁵⁾。

2) 調査時期・対象・内容

2016（平成28）年10月24日、「調理」をテーマとした学びと交流のすべての段階に参加した学生11名のうち10名（女7名・男3名、平均年齢19.7±0.5歳）を対象に学び得たことや考えたこと、今後の課題に焦点を当て、約50分間のフォーカスグループ・インタビューを空き教室を利用して実施した。

インタビューの内容は「調理」をテーマとした高齢者・小学生との学びと交流において①あなたが学んだこと・考えたこと等はどのようなことですか、②あなたが今後の課題あるいは問題だったと思うようなことはどのようなことですか、とした。

3) 調査実施方法と分析方法

実施するにあたり、すでにお互いが顔見知りであるゆえに、かえって個人としての意見を伝えづらい面もあると考え、フォーカスグループ・インタビューの中で出された個人的な意見に対してはお互いに「批判しない」というブレインストーミング（brainstorming）と他の人から知り得た情報を外部に口外しない守秘義務をルールに課した。

筆者の1名が司会、調査協力者1名が観察記録の

作成を行い、フォーカスグループ・インタビューの内容をICレコーダーで録音し、後日、観察記録と照合して内容を精査した。その上で得られたメンバーの生の表現とその意味する内容を掘り下げて把握するため、内容分析法と記述分析法を組み合わせで分析した⁶⁾。

なお、分析作業は筆者の1人が実施し、残る2人の筆者がその結果について確認・修正を行った。

3. 倫理的配慮

調査の目的・方法、プライバシーの保護に関する安全性の確保、得られたデータは研究目的以外に使用しないこと等を説明し、これらに同意が得られた調査対象者から匿名で回答を得た。

なお、本研究は松本短期大学研究倫理規定に基づき実施された（研究倫理審査承認済み）。

Ⅲ. 結果

1. 「調理」をテーマとした4段階の実践過程

図1に示すとおり、A調査の結果、「調理」をテーマとした学びと交流の実践過程は目的・内容別に4段階に分けることができた。

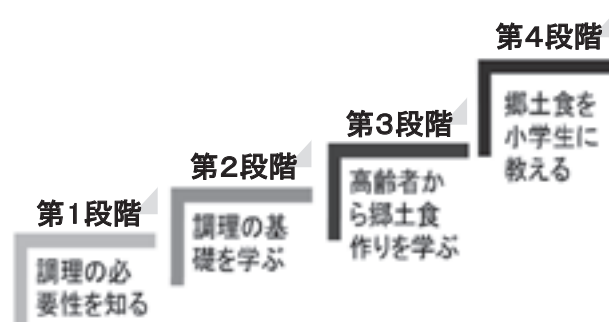


図1 「調理」をテーマとした学びと交流の第1段階から第4段階

1) 第1段階—調理の必要性を知る

介護福祉士が仕事上「役立つ」と思う家政の内容を把握するため、福田らは2010（平成22）年6月に介護老人福祉施設と介護老人保健施設、同年10月に認知症対応型共同生活介護、2012（平成24）年6月に訪問介護のいずれかに勤務する介護職である介護福祉士を対象に自記式質問票調査を行った⁷⁾⁸⁾⁹⁾。具体的には旧カリキュラムの家政学概論43項目と家政学実習24項目の計67項目について、それぞれ現在の仕事に「役立たない」1点～「役立つ」4点で評価してもらった（有用性評価）。

その結果、有用性評価の平均値は介護老人福祉施設（n=109）、介護老人保健施設（n=117）、認知症対応型共同生活介護（n=69）、訪問介護（n=137）の4種類の施設・事業所とも、「被服」よりも「調理」に関する内容のほうが高かった。例え

ば介護老人福祉施設では「洗濯」2.71に対し「調理実習」3.08であった。また、多重比較の結果、「調理実習」は介護老人保健施設(2.81)や介護老人福祉施設(3.08)よりも認知症対応型共同生活介護(3.55)や訪問介護(3.61)で働く介護福祉士のほうが、その有用性を認識していた($p < .001$)。

この結果を踏まえ、2015(平成27)年5月28日、介護福祉学科1年生の授業の中で介護福祉士にとって調理も他の生活支援技術と同じく重要であること、同年8月に行われる訪問介護と認知症対応型共同生活介護の実習では調理実習の可能性もあることを伝え、調理に対する学生の意識を喚起した。

2) 第2段階—調理の基礎を学ぶ

学生の中には生活経験が未熟で、調理等の生活支援技術に対して力不足な人もおり^{10) 11)}、介護福祉士養成教育の中で家事経験の不足を補う実習教育が必要と指摘する声もある¹²⁾。そこで2015(平成27)年7月13日、5～6人のグループに分かれて調理実習を行った。食事内容の一部が欧米化傾向にある中、介護保険制度における要支援・要介護者の85.3%が75歳以上であることから(2015年4月時点)¹³⁾、日本食の定番であるご飯・お味噌汁・卵焼きを作った。その際、学生の調理技術に差があるため、調理が得意な学生だけで進めないよう、グループ内で協力・交代しながら1人ひとりの学生が調理する機会を持った。

3) 第3段階—高齢者から郷土食作りを学ぶ

高齢者は長い人生の中で大切に培ってきた食文化があり、生まれ育った地域や生活環境等の影響を受けているため、個々の食文化を理解して尊重する支援を行うことがQOL(quality of life: 生命・生活・人生の質)向上につながる¹⁴⁾。半面、食事の文化性が見落とされ、軽視されている現実もある¹⁵⁾。そこで2015(平成27)年11月12日、長年、長野



写1 筑北村の高齢者から「おやき」作りを教わる学生

県の郷土食「おやき」を作ってきた3人の高齢者を筑北村から講師として招き、「おやき」作りを学生が教わった。具を詰める生地は水と小麦粉の割合で変化するため、計量器を使って最適な割合で混ぜ合わせるよう指導を受けた(写1)。

4) 第4段階—郷土食を小学生に教える

新人介護職は教えられることに慣れ、自分で考え・悩むプロセスが不十分との指摘がある¹⁶⁾。そこで2016(平成28)年3月24日、筑北村3小学校の1～6年生約50人が本学を訪れた際、介護福祉学科1年生が「おやキング」に扮して自分たちが学んだ「おやき」作りを今度は小学生に教えた。その際、学生と教員は事前に「おやき」の作り方を復習する等の準備を行った(写2)。そして当日は学生がスライドを使って作り方の手順を示すとともに、実際に作り方の見本を見せた。また、小学生の手に学生が自らの手を添えて一緒に生地を丸める等、教え方に工夫を凝らした。



写2 小学生に「おやき」を教える前の最終打ち合わせの様子

2. 4段階の実践を通して得られた成果と課題

1) 全体像

B調査のフォーカスグループ・インタビューの結果、7つの成果内容と2つの課題内容を見出すことができた。成果内容は①連続性のある企画の重要性、②知識の広がり新たな気づき、③一緒に調理する楽しさと安心感、④調理への意欲向上、⑤責任感と気遣いの意識醸成、⑥目指すべき介護福祉士像への参考、⑦伝え方の工夫と場作りの重要性となった。一方、課題内容には①わかりやすく説明する難しさ、②事前準備の必要性があげられた。

図2は、これらの成果内容と課題内容について、「調理」をテーマとした第1段階から第4段階のどの段階と関連するかを整理し、全体像としてまとめたものである。

	第1段階	第2段階	第3段階	第4段階
	調理の重要性・必要性を知る	調理技術の基礎を学ぶ	高齢者から郷土食作りを学ぶ	郷土食を小学生に教える
成果内容	①連続性のある企画の重要性			
	②知識の広がり新たな気づき			
		③一緒に調理する楽しさと安心感		
		④調理への意欲向上		
		⑤責任感と気遣いの意識醸成		
		⑥目指すべき介護福祉士像への参考		
		⑦伝え方の工夫と場作りの重要性		
課題内容				
				①わかりやすく説明する難しさ
				②事前準備の必要性

図2 成果内容と課題内容の全体像

2) 成果内容と課題内容

成果内容と課題内容を構成する個々のデータは、表1のとおりである。以下、表1を参考にしながら、成果内容と課題内容の中身を示していく。

(1) 成果内容の中身

例えば、①連続性のある企画の重要性には「年間を通して、こうした、つながりのある企画を行うのは大変だったが、その分、印象に残ったし、より一層達成感も感じる事ができたと思う」等、②知識の広がり新たな気づきには「1人で調理するよりも、他の人の意見を聞いたりすることで、新たな発見や改めて学ぶこともある」等が該当し、ともに第1段階から第4段階に共通する内容であった。

③一緒に調理する楽しさと安心感には「普段接する機会がある人だけでなく、地域の高齢者や小学生とも交流でき、色々な人達と関われたが、そのことによって、ただ調理するよりも楽しい時間になった」等が該当し、第2段階から第4段階に共通する内容であった。

④調理への意欲向上には「私は『おやき』を作ることがなかったが、高齢者がおいしい『おやき』の作り方を教えてくれたので、家でも作ってみようと思い、実際に作ってみた」等、⑤責任感と気遣いの意識醸成には「子ども達と一緒に『おやき』作りした時には、子ども達が『火傷等の事故に遭わない

ように』とか『楽しく作ってほしい』とか、色々な面で気遣っている自分がいた」等、⑥目指すべき介護福祉士像への参考には「『おやき』作りの仕方以前に、まず、子ども目線で考えることの大切さを感じたが、介護福祉士においても介護する前に、まずその利用者自身のことを考えることが大切であるため、今回の経験は今後、介護する上でも役立つと思った」等、⑦伝え方の工夫と場作りの重要性には「口頭だけで説明するのではなく、実際に『おやき』に具を詰めて丸めるところを見せつつ、一緒に行ったほうが小学生にもわかりやすかったと思う」等がそれぞれ該当し、いずれも第3段階と第4段階に共通する内容であった。

(2) 課題内容の中身

例えば、①わかりやすく説明する難しさには「初めて『おやき』を作る子もいたので『おやき』自体の説明や作り方をわかりやすく説明することも大切だと思ったが、実際に説明してみると、思ったよりも上手く説明できなかった」等、②事前準備の必要性には「事前の確認不足や練習不足で小学生に『上手く教えられるかな』と不安な気持ちになってしまったので、事前にしっかりと練習を重ねて本番に臨めれば良かった」等がそれぞれ該当し、ともに第4段階から得られた内容であった。

IV. 考察

1. 各成果内容・課題内容における関連性

本研究で得られた7つの成果内容と2つの課題内容について、それぞれの関連性を考察し、図2に新たに矢印を用いて関連性を示したものが図3となる。図3からは課題内容が第4段階のみで発生している一方、成果内容は第1段階から第4段階に移行するにつれ、重層化されていく様子が見える。

各成果内容の関連性は、まず第1段階から第4段階の学びと交流の実践を通して①連続性のある企画の重要性を実感し、段階的に②知識の広がりや新たな気づきを得られたと推察できる。次に第2段階から第4段階で行われた調理を通して、こうした知識の習得だけでなく、同級生や高齢者、小学生と③一緒に調理する楽しさと安心感を得られたことが推察できる。このことは④調理への意欲向上に加え、一緒に協力するからこそ⑤責任感と気遣いの意識醸成や⑥目指すべき介護福祉士像への参考、⑦伝え方の工夫と場作りの重要性にも影響を与えた可能性がある。特に⑤～⑦は介護福祉士を目指す学生には重要であり、相互に関連し合っている内容といえる。

一方、課題内容については、小学生に対して「おやき」の作り方を①わかりやすく説明する難しさを

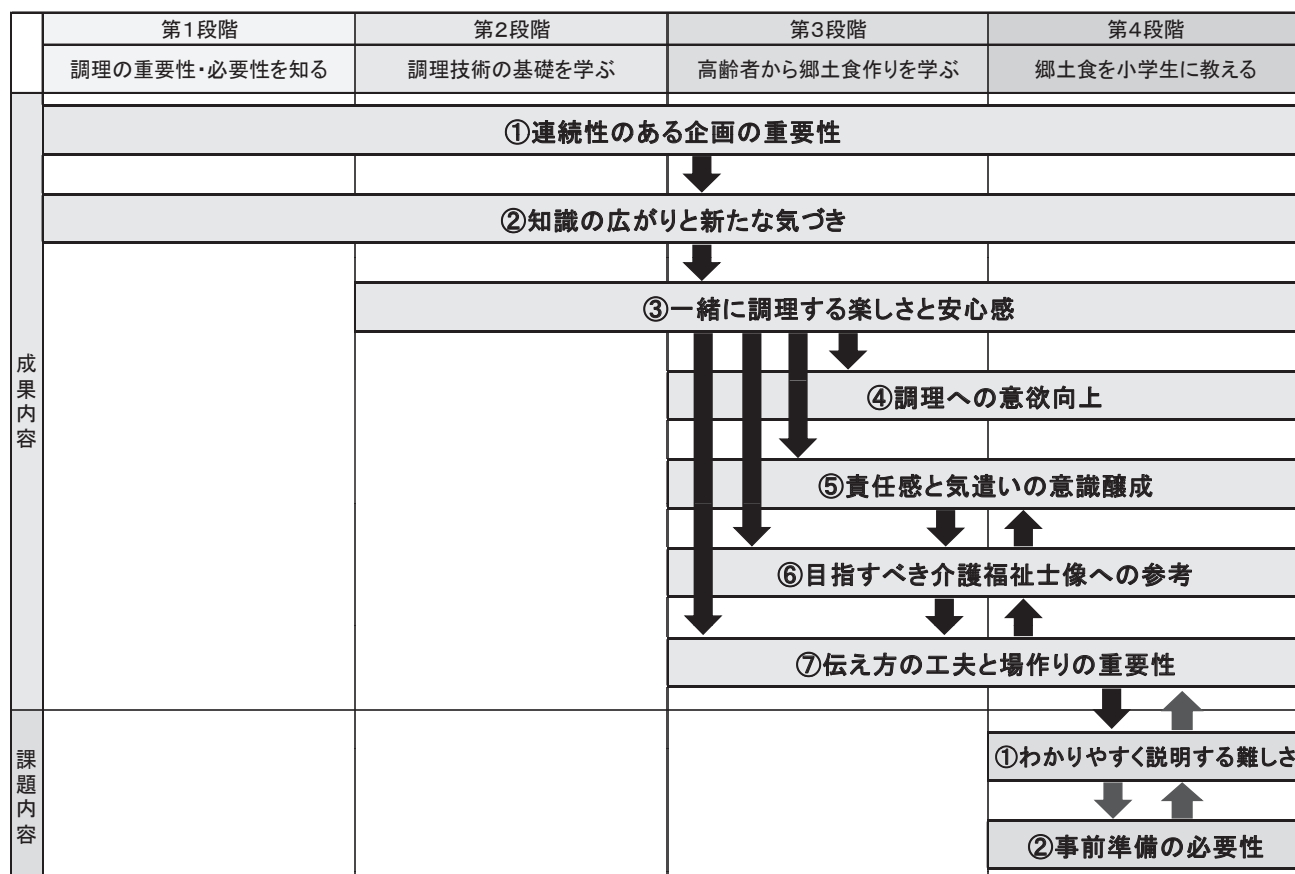
感じたからこそ、②事前準備の必要性を学生自身が内省したと推察できる。この部分については伝え方の工夫等ができた半面、難しさも感じたという両義的な意味合いが含まれているとも考えられる。

2. 学生と地域住民が関わる企画の意義と視点

「調理」をテーマとした学びと交流の実践は学生同士、学生と高齢者、学生と小学生というように、お互いが協力することで協調性を育めたほか、一緒に取り組むことの楽しさを感じることができたと推察できる。また、調理への意欲向上に加え、責任感や気遣いの意識醸成等の成果内容を考慮すれば、学生と教員のための枠組みを超え、地域住民とも接点を持てる企画を増やすことは重要である。

その際は、学生自身が学びの必要性を知り、その基礎力を養い、学び得た内容を考え・工夫して還元していくというように、単発ではなく、連続性のある企画が求められる。

また、こうした企画を実施する際、学生任せにするのではなく、教員のバックアップが重要である。良い授業のキーワードに「オリエンテーション」「動機づけ」等があげられているように¹⁷⁾、教員は根拠に基づき、学生にとって将来役立つような教育的



注)⇐矢印は、関連性の強い方向性を示す。

図3 各成果内容・課題内容における関連性

配慮を行い、学生が主体的に取り組めるよう側面から支えていく視点を忘れてはならない。

3. 相手にわかりやすく伝える力の必要性和課題

学生は高齢者・小学生との世代間交流を通して、調理技術だけでなく「どうしたら相手にわかりやすく伝えられるのか」という思考・対応力を育めたと推認できる。半面、高齢者から学んだ「おやき」の作り方を学生が「小学生にわかりやすく伝えることは意外に難しい」と感じたように、自らが得た知識・技術をどの相手にもわかる形で伝える術は一度や二度の経験だけで得られるものではない。

しかしその一方、利用者や家族、地域住民をも対象とする地域包括ケアが進展する中、介護福祉士には自らの介護福祉実践の「実践力」を「説明できる力」がより求められる¹⁸⁾。例えば、介護老人保健施設から在宅復帰する前に行われる家族への介護指導では、いかにわかりやすく家族に指導できるかが重要になる。さらに介護職によるチームケアや多職種協働の重要性も増す中、専門職同士のコミュニケーションの質や量も問われている。

したがって、調理等の技術習得だけでなく、その技術を発揮しやすい職場環境等を形成するためにも、学生の段階から多様な人たちと関わるプロセスを踏み、相手の状況に応じたコミュニケーション能力を高めていく必要がある。

4. 多様な世代の人たちと関わる重要性和意義

高齢者や小学生と関わった学生たちは「自分たちが思いもよらなかった発想が浮かぶ機会にもなる」と感じたように、同世代交流以上に世代間交流は多くの気づきと発見を得られる可能性がある。

こうした異年齢の人と人との相互作用や交互作用は学生時代だけでなく、将来、介護福祉士として働くようになってからもみられる現象である。例えば、新卒で20歳の介護福祉士と90歳の利用者、新人介護福祉士と先輩介護福祉士といったように、働く中で多様な異年齢の人と関わることになる。

しかし、保健医療福祉の課題として、最近ではお互いに忙しくメールや文書での連絡が多く、直接時間をとって話し合う機会が減少しているとの指摘もみられる¹⁹⁾。その一方で人材開発の対策上、スタッフ個人だけでなく、組織レベルや地域レベルでの情報交換がなされてこそ、スタッフの職場での業務のやりがいを見出せるとの指摘もある²⁰⁾。したがって、新たな視点に気づいたり、やりがいを見出したりするためにも、同世代を超えた多様な世代の人たちとお互いに顔の見える関係性の中で語り合う機会を増やしていくことが重要である。

V. 結論

「調理」をテーマとした学びと交流の実践は、松本短期大学と筑北村との交流事業および介護福祉士養成教育における家政教育（特に調理教育）の課題を起点として企画された。ところが、実際には段階的な実践を重ねた結果、単なる交流や調理技術の向上だけに終始せず、いくつかの相乗効果も見出された。以下、今後の課題も含めて3点述べる。

第1に、学生と教員のための枠組みを超え、地域住民とも接点を持てる連続性のある企画を実施することは「調理への意欲向上」だけでなく、「楽しさ」「気遣い」「伝え方の工夫と場作り」「知識の広がり」「目指すべき介護福祉士像への参考」等、多様な効果・可能性を引き出すことが示唆された。

第2に、特に小学生との相互作用を通して学生は「伝え方の工夫」を育めた半面、どの相手にもわかりやすく伝えることの難しさを感じる傾向がみられた。しかし介護福祉士は、その仕事を遂行していく上で様々な利用者や家族、地域住民、他の専門職等との関わりが求められるため、学生の段階から多様な人たちと関わり、個々人に応じたコミュニケーション能力を高めていく必要性が示唆された。

第3に、新たな視点の発見に加え、やりがい感を見出すためにも、同世代を超えた様々な世代の人たちと顔の見える関係性で一緒に取り組むことの重要性が示唆された。このことは学生時代だけでなく、介護福祉士として働き始めてからも重要である。

以上に共通していえる課題は、そのような可能性・体験・機会のある場をいかに大学と地域とが協力して創り出していくか、ということになる。地域の人たちとのつながりを松本短期大学の学生や教職員が学び・感じとり、同時に松本短期大学の教育力や学生の学びを地域の人たちへと還元していくことが地域に密着した介護福祉士を養成することにもつながる²¹⁾。したがって、今後も普通の授業に加え、交流事業等を活用する中で介護福祉士を目指す学生の成長促進を図っていきたいと考えている。

謝辞

末筆ながら、本調査を行うにあたり、ご協力いただいた学生の皆様をはじめ関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 深沼 光 (2010)「大学と地域の連携—継続の効果と課題」『日本政策金融公庫論集』7, 22.
- 2) 一番ヶ瀬康子 (2006)「介護福祉の基礎としての家政学」『建帛社だより土筆』84, 1.

- 3) 田崎裕美・ヒル美子・木田文子 (2007) 「介護福祉士養成教育における生活支援のための家政学—被服生活に関する提言」『介護福祉学』14 (2), 181.
- 4) 中川英子・神部順子・奥田都子ほか (2009) 「生活支援と家政学—新カリキュラムにおける家政学教育の課題」『介護福祉学』16 (2), 189–208.
- 5) 安梅勅江 (2010) 『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法Ⅲ／論文作成編—科学的根拠に基づく質的研究法の展開』医歯薬出版株式会社, 4.
- 6) 安梅勅江 (2001) 『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開』医歯薬出版株式会社, 58–59.
- 7) 福田明・上延麻耶 (2011) 「高齢者施設で働く介護福祉士に必要な家政学に関する研究：住生活分野—介護福祉士養成教育に必要な家政学の内容検討に向けて」『松本短期大学研究紀要』20, 53–59.
- 8) 福田明・上延麻耶 (2012) 「認知症対応型共同生活介護事業所（認知症グループホーム）で働く介護福祉士に必要な家政学の内容検討—介護福祉士への自記式質問票調査の結果から」『松本短期大学研究紀要』21, 25–34.
- 9) 福田明・隣谷正範 (2013) 「訪問介護事業所で働く介護職に必要な家政学の内容検討—介護職への自記式質問票調査の結果から」『松本短期大学研究紀要』22, 73–82.
- 10) 菊池啓子・皆川留美 (2007) 「介護福祉士養成における家政学実習内容の検討」『介護福祉教育』13, 67–70.
- 11) 原田理恵・高野恵子・永藤清子 (2008) 「家政学実習における宿泊実習体験の教育的意義と内容について」『介護福祉教育』13 (2), 43–48.
- 12) 田崎裕美・前川有希子 (2007) 「介護福祉のための家政学実習」『静岡福祉大学紀要』3, 75.
- 13) 厚生労働省老健局介護保険計画課 (2016) 「平成26年度介護保険事業状況報告(年報)概要」7.
- 14) 田崎裕美・新井恵子・水野三千代 「介護福祉における食文化・食習慣」『介護福祉学事典』ミネルヴァ書房, 586.
- 15) 西尾孝司 (2015) 『介護福祉援助の原理と方法』みらい, 115.
- 16) 篠崎人理・土森美由紀 (2008) 「お年寄りと向き合い, 自分自身と向かい合う」『ふれあいケア』13 (3), 24.
- 17) 近藤克則 (2001) 「私の授業実践—大学の授業改善と創造」日本福祉大学社会福祉学部 FD (Faculty Development) 委員会.
- 18) 太田貞司：地域包括ケアにおける介護福祉. 介護福祉学事典, ミネルヴァ書房, 41, 2014.
- 19) 古川宏：わが国の保健医療福祉連携の展望—私の I P W と I P E の経験から. 保健医療福祉連携, Vol.5 No.2 : 82, 2013.
- 20) 福山和女・田中千枝子 (2016) 『介護・福祉の支援人材養成開発論—尊厳・自律・リーダーシップの原則』勁草書房, 13.
- 21) 福田明・合津千香・釜土禮子 (2016) 「小学生への福祉教育と他学科との連携から介護福祉学科の学生が得られた内容検討—松本短期大学と筑北村との交流事業を通して」『松本短期大学研究紀要』25, 55.